

文化遺伝子型目録データベースの構築

宍道 勉

Tsutomu Shinji : Contruction of Mime Catalogue Database

1. 本論の狙い

a. 図書館目録への疑問

現在図書館で作成され利用されている目録、あるいはコンピュータによる「従来型」目録データベースは本当に「利用者」の「利用」を目的として作られているであろうか？そこに疑問を持ったところから本論は出発する。

つまり利用者が図書館に行きカード目録（今大学図書館や公共図書館では見かけなくなったが、学校図書館では健在である）或いはコンピュータ目録を利用するとき、彼らは予め求める図書（資料）の著者、書名、或いは主題（もしくはそれに関するキーワード）を用意していることが前提となっている。また既にそうした利用者には図書館は「目録」の他にも、主題別の「分類排列」といったいくつかの検索パターンを準備している。言葉を変えればそのような図書館が「望むとおりの」利用者には万全の備えを怠らない。あるいはそう言う「明確な」利用者を前提に存在していると言っても過言でない。

ところが図書館に情報や資料を求めてくる利用者が常にそうした検索のキーを持っているとは限らない。書誌事項や主題のいずれも持たない利用者もあるし誰しもそう言う場合がある。その場合には漠然と書架を渉猟するしか方法がない。そしてこうした図書館にとってはこうした利用者は好ましくないの

であり、それに対する配慮がなされていない。この種の利用者は仕方なく「何か」ヒントとなる資料や「何か」面白い本はないかをあてどなく探すしか方法がないのである。尤もそれによって予期しない資料との偶然の出会いがあるかも知れないが。しかしこの手掛かりのない「探し」は労多くして成果を得るのはなかなか難しい。小規模の蔵書数の少ない図書館であれば首の痛くなるのを我慢することによって「タイトル」を読む楽しみがある。しかし曖昧ではあるが「何か」を追求したい、なのにその「何か」が分からないという場合は問題が異なってくる。何故なら蔵書数の多い大規模図書館は利用者が閲覧できる「開架」資料はその一部に限られており、そのほとんどは「閉架」の状況にある。従って利用者はますます「目録」や「データベース」に頼らざるを得ない。しかも「検索キー」を持たない利用者には最初から門を閉ざしている状況にある。

こうした理由から、どう見ても現在の「図書館」が作成している目録やデータベースにはここが限界であろう。既にそれは利用者のためであるよりも図書館自身の管理を目的としているからである。

そこで著者は今の図書館ではもはや資料を得られない利用者のためのデータベースを構築してみようと思う。ただしあくまでもこれはプロトタイプであり、初めに断っておくがデータベースの利用者参加という点で問題が多いことも承知である、図書館は手に負えないと無視するかも知れない。でも確かに

こうした形のデータベースが求められているのである。

b. 目録の変遷

—1 読む目録から探す目録へ

（「探す」とは一般用語で情報や資料を探す、「検索」は図書館用語として意識的に使い分けている）

粘土板や巻物が書物であった時代から「目録」があったとされている。しかしそれは本来の意味の目録、つまり資料のリストでありその機能は第一に「資料の記録」である。従ってそれは事項の羅列でありsequentialであるから「検索」に利用する場合は、始めから終わりまで「目を通す」ことであり「読む」ことを意味していた。それは近代の図書館にあっても当初は「冊子体」目録として登場する。所蔵するのが少量の資料であれば冊子を「読む」ことで必要なものを求めるの時間を要しない。ところが時代を追って生産される資料（図書）が増加するにつれて、目録の記載事項も増えることになる。となればその中から特定の資料を「検索」することはおろか「読む」上でも不便を感じるようになった。そこで考案されたのが「カード目録」である。この形式上の利点は「加除」が容易である、つまり資料が幾ら増えようともそれに応じてカードを作成することで対応できる。

通常図書館の目録の機能は「固有名によるアプローチ (Name approach) : 著者名・書名・叢書名などからの検索—特定の図書があるかないかと、主題からのアプローチ (Subject approach) : 特定主題の図書群を検索する—その主題に関する図書の中から最適の図書を選択する」とされ、カード目録はその要求に十分に答えていた⁽¹⁾

またカード目録は「読む」と「探す」機能を同時に備えることとなった。排列が自由自在のカード目録は探すという機能をより容易なものとした。文字や記号（数字）が持っている「順序」特性を採用したのである。そのルールを知ることで利用者は図書館で資料検索がより効率的となったとされる。とこ

ろが利用者の検索効率と探す容易さを追求するためにはより「多くの」キーが必要となる。それを留意すればするほどカード目録の無限の膨らみを招くことになり図書館の負担を増加させることになった。基本「カード」から「必要な」標目の数だけ複製し、見出しを記載しさらにそれをファイルする作業の方が図書館業務において数段の労力を要したのである。その一つに「副出」「分出」があるが「これによって図書館資料を検索するときに利用者は不便を感じないように出来ていた、このことは図書館に関わる人以外の一般に知られていない、……しかし電子図書館でコンピュータが活躍してくれてもこの「副出」「分出」の機能がくまなく施されていなければ検索のメリットが半減すると」の主張もある⁽²⁾。とはいえ1冊の資料が生み出すカードの枚数は膨大になる。さらに日本語が持つ特質からして「件名」の付与が困難であった。さらには現場では利用者がカード目録に不慣れで、利用が少ないことに図書館が気付いていたこともあって、担当者にとっては余分な労力であり「無駄な」作業と考えていたきらいがある。

「件名」に関わる作業は、主題を「分類記号」で表す（つまりテキストの内容を主題に翻訳しその主題から分類記号に翻訳する）分類作業よりは手間を要したのである。

しかし人の欲望は行動がより「容易」であることを求める。それに呼応するかのようにタイミング良く登場したのがコンピュータであり、図書館は早速それを目録に適用することとなった。カード目録に掛かる重労働から解放されると考えたのである。クリフォード・ストールが「インターネットは空っぽの洞窟」のなかで、コンピュータが目録に導入されたときにアメリカの図書館司書がカード目録に向かってピストルをぶっ放したというのもあるが虚言ではなかったのかもしれない⁽³⁾。

かくして現在はコンピュータ目録が図書館を支配している。それが初めは図書館員の能力ではプログラム設計がとて出来なかった大型のコンピュータ

に始まり、やがてスタンドアロンのパソコンに収まって図書館内で利用されるようになった。データベース化が本格化したのである。目録はなおもコンピュータ進化の後を追ってやがてネットワークに対応する。OPACが行き届いたかと思うと、今や1個の図書館目録がインターネットで世界中に公開されるようになった。

—2 探す目録

コンピュータによるデータベース化によって目録は「探す」機能だけが注目されるようになった。

しかしデータベース化の出現は「科学技術情報」をシステム化することから始まったことを忘れてはならない。スプートニクの打ち上げで後れをとったと考えたアメリカがソビエトの科学技術資料を収集する必要に駆られて出来上がった。それが図書館目録へと転用されたのである⁽⁴⁾。

しかし「科学技術資料」を検索するデータベースの機能が、図書のコンピュータ目録が持つ欠点を覆い隠すことになっている。つまり「早さ」「便利さ」の利点ばかりを追求するあまり、目録が本来持っていたはずの「読む」機能を喪失させたのである。

ところがそのことに誰も気付いていない。つまりカード目録は「人(図書館司書)」の「手」作りであったがゆえに情報が不十分であり利用者からは「完全なる」信頼が得られなかった。その反面の利点は一枚ずつカードをめくる、つまり「読み」ながら「人」が自分の目で内容を確認をすることであった。ところが人(利用者と図書館司書)は「機械(コンピュータ)」が作る目録には何故か「信頼」を置いているから、探す機能とプロセスを全てそれに任せてしまった。だからその結果についてもいささかの疑念も疑問をも抱かないのである。

一方、カード目録では探す「人」がカードの記述を「読み」判断する、だから曖昧な部分をも見分け情報を選択することが出来る。つまり予期していなかった「資料」を拾う可能性を備えている。ところが「機械」であるコンピュータは曖昧さを読むこと、見分けることは出来ない。すなわちコンピュータ目

録の持つ「最大の」欠点は内容が「読めない」ことでありカードの持つ「一覽性」に欠けることにある。

科学技術資料のためのデータベースを図書目録にも採り入れたのが決定的な誤りであった。読書や楽しみで情報を探す一般の人にとっては科学技術資料のように「キーワード」で「整然とした」情報を求めているのではない。読む人は混沌の中に楽しみの本を探しているのである。

そこで望ましいのはカード目録の復権である。コンピュータ目録との共存である。昔のように1枚ずつカードを作成しなくても、コンピュータのデータをカードに打ち出せばさほど複製作業も見出し語「付与」も困難ではない。しかしファイリングやカード目録スペースなど「原状」への復帰について恐らくは図書館だけが必死に抵抗するであろうことは目に見えている。作業量の増大を伴うからである。

それではコンピュータの持つ能力を活かす目録は他にないかと考え、到達したのが「文化遺伝子(ミーム)型データベース」である。

—3 探すから「辿る」目録へ

現代では図書館あるいはインターネットで情報や資料を探す場合、いずれも「ロボット型」か「ディレクトリイ型」のいずれかの方法を採用。勿論図書館では目録が「ロボット型」方式、分類が「ディレクトリイ型」検索システムに当たり、一方インターネットの検索エンジンでinfoseekとかgooが前者の役目を果たし、YahooやExciteが後者に相当する機能を持つことは申すまでもない(Yahooはロボット型として使われることが多いが)。そして前者は図書館の目録作業の標目作成のような索引作業が日夜行われ、同様に後者は事項の分類作業を行っている。それ故に図書館と全く同じような「誤り」がある。例えば前者では索引語の付与を怠ったり、語彙不足による見逃し、誤りがあるであろう。後者の図書館分類担当者にはよって「誤入」や「コウモリ」問題で区分(分類)が適正でなかったり時には能力が及ばず不可能な場合がある。

このことは既に「言葉」「概念」から情報や資料を「探すという行為」「プール演算式」には限界があることを意味している。

そもそも情報を「探す」とか「検索」とはどういうことなのであろうか。本来の目的は探すことでなく、探して得られた結果を利用することであるはずである。ところが現在の目録(従来型データベース)は探す(検索)用語とデータベースの中から得られたデータにある「言葉」が一致(ヒット)すれば目的を果たしたことになる。検索の中身の評価は二の次となっている。つまりデータベースの「探す」能力、機能の面だけを見てきたように思うのである。果たしてデータベースに求めるのは「探す機能」だけであらうか。利用者の目的と合致すると考えているのはデータベース作成者、つまり図書館だけのようないかなる気かしてならない。利用者はデータベースで情報を探すとはそんなものだと思込まされているに過ぎないのである。

つまり情報を探すにおいてもその意味を「見つける」こととしているが、それは多くの情報の中から求めるものを「選択」することであるはずである。

その観点からすればこの様な状況下の目録では、もともと探す言葉を持たないが「探す」ことを求める人には何ら役に立たない。それを解決するには「何か」から「何か」へと「辿る」方法が残されている。どの様に辿るか、そのヒントが「遺伝子」であり、文化の世界では「文化遺伝子」の働きである。

3. 文化遺伝子 (ミーム=meme)

a. 文化遺伝子とは何か

2章の最後に「何か」とは「何か」を辿る目録の可能性を考えた。その「何か」に相当するのが文化遺伝子(ミーム)と考える。

文化遺伝子(ミーム=meme)とはリチャード・ドーキンスがその著「利己的な遺伝子」で名付けたもので「文化的伝達は遺伝的伝達と酷似している」「文化伝達の単位、あるいは模倣の単位を伝える名

詞である。模倣に相当するギリシャ語の語根(mimeme)を縮めて〈meme=ミーム〉とする。」「楽曲や思想、標語、衣服の様式、壺の作り方、あるいはアーチの建築様式など……遺伝子が遺伝子プール内で繁殖するに際して、精子や卵子を担体として体から体へと飛び回ると同様に……広い意味で模倣と呼びうる過程を媒介として脳から脳へと渡り歩くのである。」「類似が進化である⁽⁵⁾。」と考えた。この理論を継承したりチャード・プロディはその著「ミーム」でさらに「私たちが文化と呼ぶものはすべて原子(生物学では「分子」であるが)のようなミームからできており、そのミームが互いに競合していることになる。……競争に勝ったミーム、すなわち最も多くの心に入り込むことに成功したミームは、今日の文化を形成する活動や想像に大きく貢献するのである。」としている⁽⁶⁾。ただドーキンスは「ミームが脳から脳へと渡り歩く」と表現したのに対し「心から心へと移り広がっていく」と異なっている、これもミームのなせることなのであろう。(以下、データベースの名称は「文化遺伝子データベース」とし、文化遺伝子は「ミーム」と記述する。)

そこで私はそれを文化的活動に置き換えてみた。

人が求める「知」の中にある「何か」はある模倣の単位であり、ミームである。それを繋ぐメディアの役割を果たすのが文化DNAと考えたらどうであらうか。

例えば小説を見るとウンベルト・エーコの「薔薇の名前」の中でそれを証明できる。はじまりに「薔薇の名前」の古文書(アドソンの記録として構成されているが、実際はエーコが創った「架空」の記録文書)の紹介がありアリストテレス、フランシス・ベーコンを登場させる⁽⁷⁾。そのことは彼らの思想が別々に生まれたのではなく総べてミームによる「つながり」を示しているわけである。またエーコはこの小説の核心となるイタリア中世の教会図書館を「中心と出口とを有する迷宮、その出口は一つであるが多量の試行錯誤過程を伴う迷宮(迷路)はどの通路

とも繋がっている。」としている。しかもそれがアルゼンチンの作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスが「バベルの図書館」⁽⁸⁾で描いている情景の模倣であるのは定説である⁽⁹⁾。またこの歴史ミステリーの舞台となっている中世イタリア北部の修道院（教会）の長老ホルヘは「盲目」という人物設定であるが、その名前をボルヘスのファースト・ネームから取っているだけでなく、ボルヘスがアルゼンチン国立図書館長時代に失明していた事実をも物語に組み入れるという念の入った「模倣」がある。またその修道院で起こった殺人事件の調査依頼を受けて巡回修道士パスカヴィルのウィリアム修道士が登場する。これがコナン・ドイルの探偵シャーロック・ホームズその人であり、この事件の記録者でありウィリアムの弟子であるアドソこそホームズの友人で事件の記録者・相談者である「ワトソン」にあたる。「アドソ」は「ワトソン」をもじったものであることに気付くであろう。

つまりここに登場する作家、人物、思想は全てエーコが他の「テキスト」や「人物」にあるミームを取り出し「組み替えた」繋がりの方である。エーコはアリストテレスやベーコンのミームを受け継いでいるが、この小説という文化にはボルヘスの遺伝子が最も強く継承されている。また文化DNAはコナン・ドイルのミームをも読むことが出来るのである。

b. 全て知は繋がっている

生物が進化する上で「遺伝子」が重要な役目を果たしているのと全く同様に、文化はミームで伝わる。それを繋ぐメディアが文化DNAであり、過去との繋がりこそ「知」である。つまり「知」とは蓄積（数量化）ではなく、過去から未来へとの繋がりである。同様の考え方が様々な形で、つまり様々な学問分野で捉えられている。

記号論の世界ではウンベルト・エーコが「開かれた作品」の中で「テキストは作者から離れたときに一人歩きする。読み手によってそのテキストは全く

異なったものとなる」という意味のことを述べている⁽¹⁰⁾。ここでは「読み手」にはテキストにあるミームが文字という記号＝メディア（DNA）を介して伝わるのである。読み手それぞれによって解釈が異なるのは読み手のコンテキストが異なるので脳の中でミームが組み替え形成されたと考えればいい。

言語学的な見地からはW-J・オング「声の文化と文字の文化」に見ることができる。オングはテキスト間の相互影響（間テキスト性）と言う言葉で「テキストはたんに体験された経験だけでは作れない、小説家が小説を書けるのはその小説家がテキストを織り上げて経験を組織することに慣れているからである。他の多くのテキストから一つのテキストが作り出されたのである。（それが）みんなに共通の決まり文句やテーマが借用され、手を加えられ、共有されたのである⁽¹¹⁾」としている。ドーキンスの言葉を借りれば、オングは経験による「模倣」つまりミームが存在する、あるいはその組み替えが行われるからこそ異なったテキストが出来上がることを示している。（エーコのテキストとオングのテキストは訳者の表現の違いである）

またエクリチュール（書くこと）の歴史から見たJ.D. ボルターはその著「ライティング・スペース」の「プログラムとしての小説」の章で「今日においては非常に多くの実験的小説ないしは小説家が存在し……自分の冒険は自分で選択しよう、自分の運命は自分で見出そう、といったタイトルの小説で小さな読者にコンピュータゲームのようなものを与えている。こうした書物の中にはどれでも八岐の庭があり、ここでの小径のなかから読者は任意のものを選んで行く。すると例えば、18ページの下にはこんな風を書いてある、あえて危険を覚悟で呪いを使ってみるのなら29ページを見よ、トンネルを突進する途を選ぶなら2ページを見よ。この書物はページの単線的な順序を犠牲にして多様な読み方を可能にしている。こうしたプログラム方式の小説は……⁽¹²⁾」としている。これは小説の構成には作家が他から継承した様々なミームを組み込んでいる。それを読者が

受け継ぐのは読みの途中でメディアであるDNAによる影響が強いことを示唆しているように思える。多様な読みとは読み手や作家のそれぞれのミームが入り組んで相互に影響していることになる。

c. 知はミームの組替え

前述のオングは「知識とは過去とのつながり」と言ったが、これは正しく遺伝学理論と通ずる考えである。人間の遺伝子に黒人、白人、黄色人と多様性があるように、学問にも多様なミーム(文化遺伝子)があると考えて良いだろう。そして人種間の遺伝子が交わって混血が生まれるのと同様に、学問の世界ではミームが交わって、あるいは突然変異によって新たな学問や「学際」的学問が生まれる。同様な学問が研究されているようでそれぞれが異なるのは、そこにミームの組み替えが行われるからである。

我々が次から次へと現れる「創作」品と言われるテキストを読んでいるが、新たなミームを読んでいるのではなく、組み替え遺伝子を読んでいるのかも知れない。

d. デューイの分類は知識分類ではない

メルヴィル・デューイが考案し現在の図書館のほとんどが使用している十進分類体系は知識分類であると同時に学問分類とする考えがある。確かに10に分けられたそれぞれの「類」の中で学問を細分化していくヒエラルヒー構造は現在の学問社会・体系を表すのに相応しい。現在の融通の利かない縦割り形態の学問を象徴している。同時に縦割りであるために「類」間に何らの繋がりが無い。互いに影響しあうことのない別世界である。しかし前項に述べたとおり「知」は全て遺伝子で繋がっており、その違いは遺伝子組み替えとそれを読み解く文化DNAによるものであると考えれば、「類」間に繋がりのない、関係を持たない「十進分類体系」は「知の分類」とは言えない。

4. 文化遺伝子型データベースと従来型データベースの相違

a. 構造

—1 従来型データベース

従来の目録やコンピュータ・データベースは「検索語」を選ぶことから始まる。検索はデータを求める人(エンド・ユーザ)か図書館員が行う。データベースはデータ(思考)の「カオス」(混乱した集合体)であるが、データの中に含まれる項目にルールと共通性がある。従って「(検索の)条件」に基づいたデータベースへの命令で共通する「検索語」によりデータの集合(検索集合)が可能となる。目録の場合はカード形態であれ、印刷媒体の情報資料であれ「人の眼」で目録の中にある「検索語」と同類の「用語(同義語や関連語を含めて)」を発見(同定)し、照合する活動である。確認(identify)すると「検索語」が「載っている」データが正しい検索結果として記述されリスト化される。コンピュータ・データベースでは「検索語」がスキャンする。データ中に検索語があればリストして羅列される。いずれの場合も検索の結果、そのデータには共通の要素(検索語)はあるが互いに繋がりは無い。つまり検索集合体の各データは並列関係(データの束)に過ぎない。

—2 文化遺伝子データベース

本章の概念図の解説で述べるとおり、このデータベースは「ミーム」を探すことから始まる。それは検索者(利用者=読者)が持つものでありそのコンテキスト、メディアである文化DNAが様々である。先ず読者はそのDNAを使って過去の「知」に関わるデータを取り出さなければならない。すなわち彼のミームの元となった「本(情報)」を取り出す。引き出した最初のデータAから作者が継承してきたミームや読者がそこに見つけたミームを抽出することから始まる。そのデータの記述の中にある項目「ミーム文献」に触れる(現実にはクリックする)

と、メディアDNAによって別のファイル（データベース）のデータBに導かれる。同様にBはCへ、CはDへとデータを繋いで読者を過去から未来へと永遠に導いていく。これらのデータには模倣された同じものあるいは分子（文字）が組み替えられたミームが存在し、データは繋がって（リンクして）いる。このようにテキストを読み知識を得るとは知の膨らみであり、過去のミームを読み解いていくことを意味している。

つまりデータB、C、Dは繋がった「直列型」であるが、それは読者がそれぞれ自分のDNAで読み解読した繋がりである。別の読者とDNAが異なればその「繋がり」は見えない、解読できないものである。

別の表現をすれば、ロゴスに基づく「近代科学」には論理、客観性のもとに同類の学問分野でだけ通用する「引用」というデータ間の繋がりがある。それは正しく生物の進化と同様に本来のミームの継承である。異分子が生まれる可能性は少ない。

その一方、「近代科学」では測れないパトスの文化ではデータの「繋がり」が明確ではない。つまりそれを読む人の心それぞれに表れてくる多様に組み替えられたミームがあり、それは論理的でないし、実験で検証されない。客観的でないことに特徴がある。全く異なった学問分野との間でもミームのやり

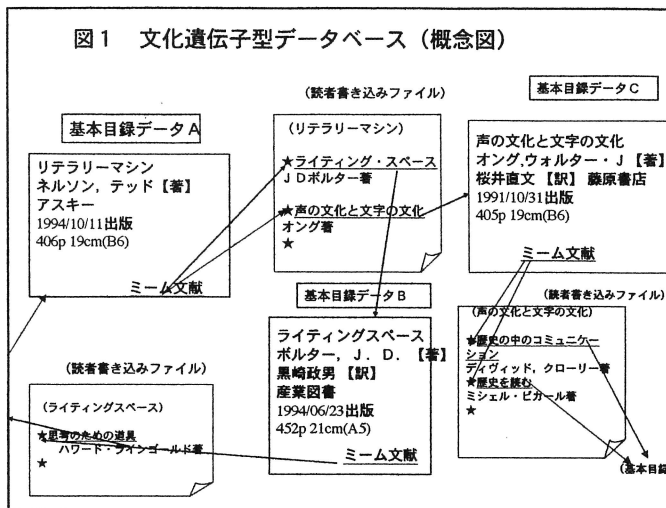
とりが行われる、経済学の中に文学の遺伝子が紛れ込むように。これをミーム組み替えによる継承という。

b. 概念

—1 文化遺伝子データベース

概念を「概念図」（図1）で具体的に説明する。

読者が図書館（データベースのある世界）に「何か」を求めてやってくる。先ず最初にその「何か」のきっかけとなったテキストを見る。ここではそれがテッド・ネルソン「リテラリー・マシン」であったとする。基本データベースでこのテキストの所在確認をする。そのデータ（基本目録データA）の画面を開く、そこで「ミーム文献」ボタンをクリックする。すると「読者書き込みファイル」の「リテラリー・マシン」の項が開く。そこには「誰か」ミームを読み取った人がテキスト「ライティングスペース」と「声の文化と文字の文化」の2件を書き込んでいる。そのタイトル（……）をクリックするとそれぞれの基本データB「ライティングスペース」と同じくC「声の文化と文字の文化」に辿ることが出来る。次にそれぞれの基本データの「ミーム文献」をクリックすれば「読者書き込みファイル」に辿ることができる。B「ライティングスペース」のミームは★「思考のための道具」（ハワード・ラインゴ



ルド)に繋がりを見ることが出来る。またC「声の文化と文字の文化」のミームは★「歴史のなかのコミュニケーション」(デヴィッド・クローリー)や★「時間を読む」(ミシェル・ピカル)に見つけることができる。読者が書き込んだミームを辿って、別の読者は自分の知らなかったテキストに永久に辿っていく。「知」の世界、それは「迷路」の世界でもあるが文化DNAを読むことによってどこまでも繋がっていく。つまり読書の楽しみも学問の世界も無限に広がるということを意味している。

一見して「読者書き込みファイル」は従来の図書館の感覚からすれば参照ファイルであると片付けられるかも知れない。しかしそれと明らかに異なるのは「ミーム」を見つけた読者が次の本にリンクするのである。そして別の読者がそのミームをさらに他の本に発見するところに特徴があり、それがミームのミームたる所以である。ここには図書館データベースのような管理者は存在しない、不要である。

一2 従来型データベース

データを蓄積したファイルと、検索機能からなる。設計からデータ入力まで全ての構築過程を図書館が全て管理する。図書館の所蔵データベースも書店や情報専門業者のように個々のデータをもっと豊かにしないと製品としての情報価値は極めて低い。カードの情報と量的に変わらないのでは、利用者にとって利用価値も当然低く見なされる。書誌情報ならばWeb上で公開されている図書情報の方が利用者にとって遙かに有効である。そこで図書館のデータベースの構築に当たっても、図書館が自ら設計をして、例えば書誌情報に「目次」情報、さらにはvisualな「表紙」が加われば「読む」情報として活用できるであろう。

5. 引用型データベースと文化遺伝子型との違い

a. 構造

文化遺伝子型と名付けたこのデータベースを「引

用データベース」と類似していることを認めなければならぬ。引用型データベースとは例えばガーフィールドの考案になるScience Citation Indexが代表的である。しかし両者が全く「似て非なる」ものであることはこれまでの説明でお分かりであろう。念のために次の点を上げておこう。

1) 引用は縦(過去)に遡る

引用は引用者(作者、著者)が自分のテキストを作成するに当たって参考とした過去のテキストを利用したことの証を表したものである。つまり引用者が過去のテキストの中に受け継いだ文化遺伝子の存在を紹介している。さらにその被引用者はまたそのテキストより過去のテキストを引用している。引用者は主体でありながら過去のテキストに縛られた状態にある。宇波によれば「引用はかならずもどのテキスト(引用の理論ではこれをプレテキストと呼ぶ)に対する除去・付加・婉曲・誇張などの操作をとまってなされる。」という⁽¹³⁾。つまり引用されるものはどんどん過去に遡っていく、縦に連なっていく。引用の場合は文化遺伝子の「同族的」遺伝である。引用者すなわち遺伝子の継承者である。同民族(文化)あるいは一定の学問分野内の伝達であり、DNAは同じものである可能性が高い。一見して同種のものと同断できる。例えば医学文献は過去の医学及びその関連領域の学問の引用(継承)で成り立っている、それ以外の学問分野が入り込む余地はない。

2) ミームは縦・横に繋がる

第一に引用と異なって「過去」に遡るのではなく「現在」や「未来」のテキストへと繋がっていく。第二にテキストと繋がるテキストとの間には模倣(ミーム=文化遺伝子)が存在するが、これは異なった文化(異民族)とか異なった学問分野の間にもあり、いわば横の繋がりと考える。DNAを構成する分子は同じであるが、組み合わせが異なっている。一見すると異種のものに見えることが多い。例えば図書館学の分野で分子生物学のテキストを読むようにである。もともとは同じであったミームが分

化していった、それがあつた時組み替えられた文化遺伝子をDNAで読むことになるのである。引用では同族間でしか遺伝子が伝わらない。

b. 構築者

引用（参考）文献は文献を作成するに当たつて著者が理論上、実験上で利用した「参考とした」文献を文末に掲載するものである。それは読者がその文献の理論を「再現」「確認」出来ること、それによつて著者の理論に客観性があることを証明するために存在するものである。文献作成者と被引用文献作成者との間には「明白な」文化遺伝子の継承がある。従つて引用型データベースは両者の関係が明らかであるから、構築者はデータベース管理者そのものである。

一方、文化遺伝子データベースではあるテキスト（文献、作品）の中にミームを見つけた読者が元のテキストとリンクを張るのである。テキスト間に理論的な繋がりが問題でなく、直感的な繋がりであればいい。構築者は絶えず「読者」である。

6. 文化遺伝子型データベースの構築法

a. 基本設計

—1 基本ファイル画面

次の「フィールド（項目）」で構成される。

i. CODE：（テキストファイル）

そのテキスト（本）固有のコード（8桁に限定）であるだけに初期入力の際に必ず記入されるべきものである。

ii. 書名：（テキストファイル）

iii. 著者名：（テキストファイル）

iv. 出版社名：（テキストファイル）

v. 発行年：（テキストファイル）

vi. サイズ：（テキストファイル）

現在は本のサイズは読者にとってさほど重要なものではないので外しても良いと考えている。

請求記号（分類記号はNDCの数字、著者記号はア

ルファベットでも仮名でも良いように「テキストファイル」である。

これらのデータはいずれも外部資料からダウンロードできるものである。

vii. 備考：（テキストファイル）

今回の設計で「本」の所在箇所を示す「請求記号」を入れていない。

初期入力画面は「サンプル図」の通りである。

—2 ミーム文献ファイル画面

ミーム文献を収めたデータベースでテキストAにテキストBのミームがあると判断した場合、読者は以下のように入力することができる。

・関係するAとBの書誌事項が、1レコードに入力される。

a) まず、A→B、B→A 2方向のミーム関連データがすでに「基本ファイル」に入力されているかどうかチェック（検索）する。

b) 上記2つとも入力されていないときは、本来はこれら2つのレコードを新規入力しなければならないが、基本ファイルは「管理者」に委ねるとすれば不可能である。ここがこのデータベースのネックである。基本ファイルにレコードがある場合は、入力されていない「ミーム文献」データを新規入力する。

—3 リレーション

基本ファイルとミーム文献ファイルとをリンクして利用者がデータを「辿る」ことを可能にすることができる。

実際の手順は前章の「概念図」で示したとおりである。但しここで示したとおり、ある一定以上のデータを持つ基本ファイルが必要な条件であろう。

b. 実際の入力

「基本データファイル」と読者がミームを書き込む「ミームファイル」の、2つのファイルから構成されその2つがリンクされている。今回プロトタイプの構築はファイルメーカーPro5を利用した。

基本データファイル（図2）は形態上は従来型と

図2 ミームデータベース基本画面

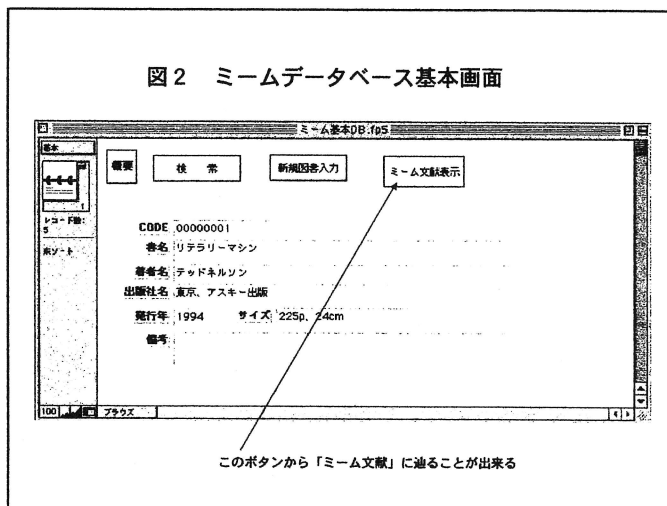


図3 ミーム文献ファイル

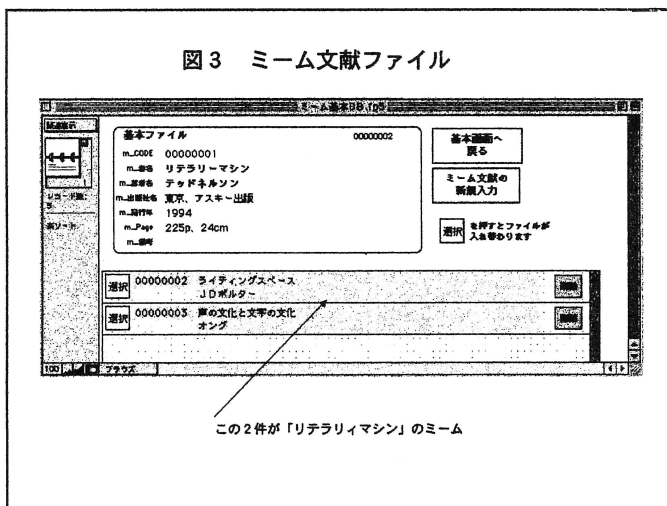
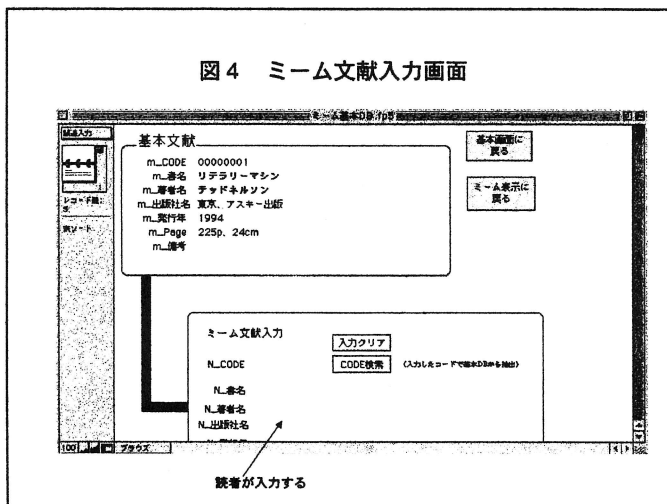


図4 ミーム文献入力画面



同じでレコードのフィールド設計には書誌事項が設定されている。従来型と違うのはそのレコード上に
もう一つの「ミーム文献ファイル」へリンクできる
項目「ミーム文献」が設定される。この基本ファイル
は従来型の通り「図書館」が設計・入力を含めて
全体を構築し管理するのがいい。今このレコードに
は「リテラリーマシ」がある。

このデータベース設計にはリレーショナル型の
データベース・アプリケーションを採用する。当然、
このデータベースも一般のそれと同様に検索機能
を必要とする。今回は「ファイルメーカーPro5」
を利用した。

基本レコード「リテラリーマシ」のミーム文献
ボタンを押して「ミーム文献ファイル」(図3)に
到達する。「基本ファイル」の書誌事項が表示され、
その下方にすでに他の読者が書き込んだミーム文献
(ここでは「ライティングスペース」と「声の文化
と文字の文化」が表示されている。詳しい書誌事項
を知るためには「選択」ボタンを押すと「基本デー
タファイル」に繋がり、該当のレコードにリンクさ
れる。

読者が新たに「ミーム文献」を加えたいときには
図2の「ミーム文献の新規入力」ボタンを押すこと
によって「ミーム文献入力画面」(図4)に到達す
る。その文献が「基本ファイルデータベース」にレ
コードがあるかを検索し、あればそのコードを入力
するだけで「ミーム文献レコード」すべての書誌事
項が満たされるようにする。「基本ファイルデー
タベース」に存在しない場合はその読者が書誌事項
を入力することとなる。今回のプロトタイプではその
ように設計したが、読者の書き込みの負担を考えると、
例えば「書名」だけを入力すれば自動的にどこ
か「書誌ファイル」に繋がりそこから他のデータ
を取り込むような工夫が必要となろう。

もちろんこの書き込みはデータベースに参加す
る「読者」でありデータベース管理者(図書館)は
関わりを持たない。リンクされたデータ間の繋がり
は読者が読んだ文化遺伝子によるものである。論理

性はないが予期しないミームの登場が読者(デー
タベース利用者)の楽しみをかきたてるからである。

7. 文化遺伝子型データベースの応用

現にLANやWeb上で利用されるようになってい
る公共図書館や大学図書館は「読者参加」のデー
タベースなど思いも寄らないと考えるだろう。恐らく
は無視するであろうし、考え方も拒否するであろう
と予想される。何故ならそのデータベースを運営す
るのは図書館員でなく利用者自身だからである。

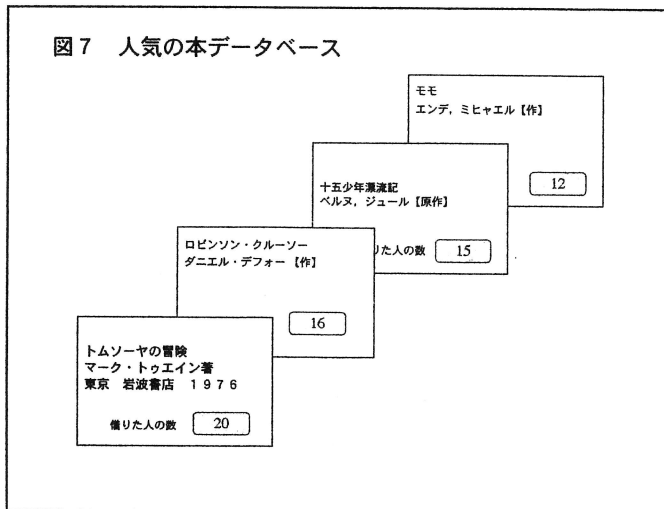
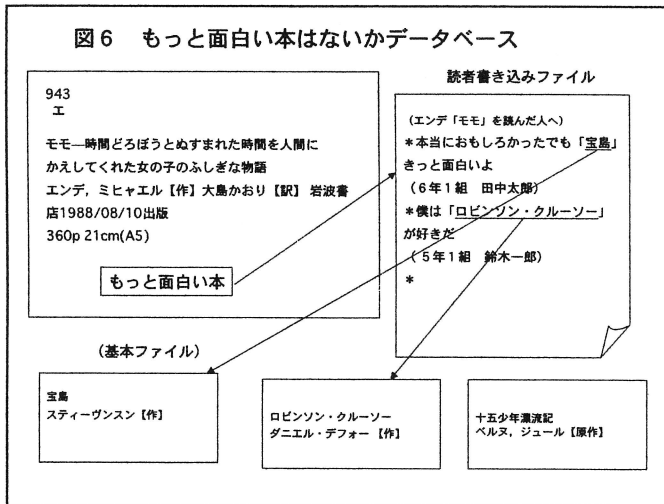
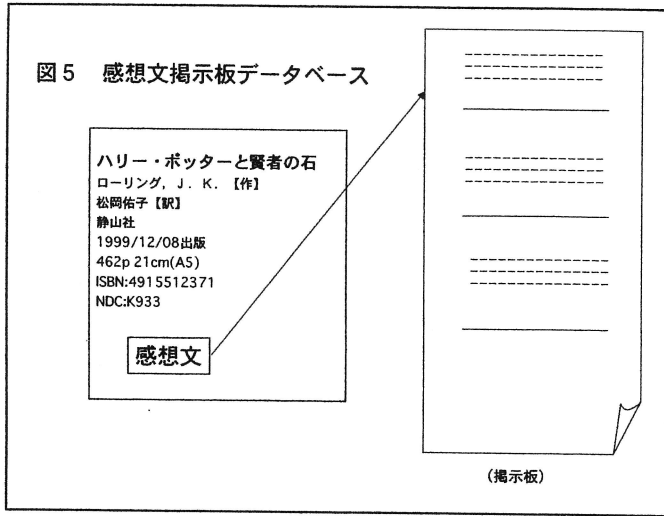
この方式で直ぐにも活用できるのは学校図書館で
あると考えている。何故なら基本ファイルとなる所
蔵資料が適当な量であり、しかもデータベースが図
書館(司書、司書教諭)の考えに基づいて構築され
ている。つまりアウトソーシングが進んでいないか
ら図書館の思い通りに出来るからである。

a. 「感想文掲示板」データベース(図5)

児童・生徒達が基本データベース上の本のデー
タからリンクを張って自分が読んだ本の情報を提供す
る。彼らの興味・関心に「面白さ」の違いがあるの
で、様々な本との出会いがある。彼ら自身が自由に
読書の感想を書き込める、いわば「掲示板」が基本
データベースにリンクするのである。

これは書誌事項を記載することもないので、フ
ラットに書ける「ワープロ」でも良いし、Web上
に「掲示板」ファイルを作っておき、児童生徒が自
由に書き込めるようにする方法もある。

自分が読んだことのある本をみんなはどう読んだ
のか、どう違うのか、友人の読書を伺い知ることが
できる。読書への刺激となる可能性がある。みんな
との読みの違いを知る。親や教師が押しつけの読書
指導をしなくても子供の間のネットワークで互いに
本の情報を交換するのである。



b. 「もっと面白い本はないか」データベース

(図6)

学校図書館に望ましいデータベースであると考え
る。

口頭ではなかなか云えない自分の好きな本を、お
薦めの本のことを友人に伝えることができる。また
自分が知らない本を誰かが教えてくれるかも知れな
い、そんな希望を持てるデータベースである。知っ
ている本が広がる世界でなく、知らない本の世界を
訪ねることが出来る。

これはいわば「文化遺伝子データベース」の「学
校図書館版」あるいは「子供版」である。読者であ
る児童・生徒がミームを増やしていくのである。匿
名性のない、目に見える「児童・生徒」のネットワ
ークの形成である。

通常の所蔵データベースと併用し、書誌事項に加
えて「君にお勧めの本」と名付ける項目を載せる。

図6で言えば、ミヒヤエル・エンデ「モモ」を読
んで感動した田中太郎君は誰かにその本を教えたく
なり、「モモ」のデータの「君にお勧めの本」ボタ
ンをクリックして「お勧めの本ファイル」に飛ぶ。
そこに友人に教えたい別の本「宝島」を紹介する。
そこを訪れた別の友人が「宝島」をクリックすると、
基本ファイルにある「宝島」のデータにたどり着く。
同様に「モモ」を読んだ鈴木一郎君は「書き込みファ
イル」に「ロビンソン・クルーソー」が好きだと友
人に知らせる。

c. 「みんなに人気の本」データベース (図7)

学校内、学校図書館で「読書量」をグラフや数字
を張り出して競うことが行われている。しかし児
童・生徒に人気の本に関する情報は「口コミ」で伝
わることは分かっているが、それをデータで裏付け
ることはできないか、から思い付いたデータベース
である。Webへの「アクセス」回数に応用である。
貸出の際に自動的にデータ上に貸出頻度の「カウン
ト」を表示する項目を作ればいい。貸出状況を知り
たい教師や子ども達は貸出順「数字」に多い順、少

ない順いずれにもソートしリストができる。この数
字はアクセス頻度でなく、貸出数でなければいけな
い。子ども達の読書傾向を把握できるかも知れな
い、選書の参考資料に役立つであろう。本来は貸出
の競争意欲、読書意欲へと駆り立てることを目的と
する。

8. 結 語

現在の図書館は電子化を前に無力であるように見
える。デジタル資料とアナログ資料をただ手をこ
まねいてなすがままでいるだけである。このまま
では必ずやその存在は失われるであろう。現状のあ
らゆることに疑問を持つことが求められている。目
先の細かいところだけを見て本来の利用する人のこ
とを考えているか、疑わしい。

つまり研究対象は利用者であり人間学としての図
書館学を究める必要がある。明らかに図書館は自ら
の存在理由を見失っている。人類にとって図書館は
それ自体が目的でない、そこにあるのは場としての
意味よりも、メディアとしての存在が大きいの。つま
り資料を収集所蔵する、人々にそれを提供する、人
はそれを読む、その為にだけ図書館は意味を持つ
ている。

その役割の要である現在のデータベースで利用者
は満足しているか、決してそうではない。図書館が
満足していると思込んでいるにすぎないのではな
いか。幸か不幸か利用者はまだそれに気付いてい
ない、満足か不満かが分からない。そこで重要な
データベースを見直すことを提案するのだ。もちろ
んこれはプロトタイプである。ここからさらに「利
用者のための」さらなるデータベースが構築されな
ければならない。

あらゆる社会システムは既製の事実を甘んじて受
け入れる体質がある。確固として存在する或いは目
に見えない「既製」という名の法律に人々は無力で
あり、意識的或いは無意識にそれに縛られている。
しかも悪いことにはその事実気付いていないので

ある。

今回紹介した文化遺伝子データベースはプロトタイプであり正確な書誌事項のチェックなど管理の問題が多くまだ「未完」である。さらに活用しやすいデータベースを考えたい。

最後にこの論文は宍道が考えたデータベースについて、佐々木が設計をしてくれたものであることを述べておきたい。文章表現についてはすべて宍道に責任がある。また本学生生活学科生活経済専攻の野津伸治助教授、株式会社「サンメディア」の立道氏にも貴重なご意見を頂いたのでお礼を申し上げたい。

参考文献

1. 鮎澤修「分類と目録」(日本図書館協会、1995、pp 92-93)
2. 阿刀田高：初めに言葉ありき、2001、季刊本とコンピュータ2001年秋号、p. 58-9)
3. クリフォード・ストール「インターネットは空っぽの洞窟」(草思社、1997)
4. 石川徹也：電子図書館はどうなる、2001、Intercommunication、no. 36、p. 118-23
5. リチャード・ドーキンス「利己的な遺伝子」(日高敏隆他訳、紀伊國屋書店、1991. pp. 301-5)
6. リチャード・プロディ「ミーム」(森弘之訳、講談社、1998. pp. 36-8)
7. ウンベルト・エーコ「薔薇の名前」(河島英昭訳、(東京創元社、1990)
8. ホルヘ・ルイス・ボルヘス「バベルの図書館」(「伝奇集」所収、岩波文庫、1993)
9. ニルダ・グリエルミ「『薔薇の名前』とボルヘス」(谷口勇訳、而立書房、1995. pp. 56-8)
10. ウンベルト・エーコ「開かれた作品」
11. W-J. オング「声の文化と文字の文化」(桜井直文他訳、藤原書店、1991、pp. 273)
12. J.D. ボルター「ライティング・スペース」(黒崎政男他訳、産業図書、1994、pp. 244)
13. 宇波彰「引用の想像力」(冬樹社、1979. pp. 40)